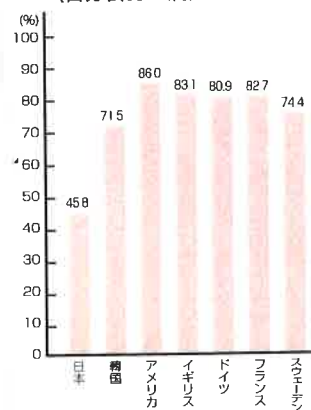


新生児の頃からの、 愛着形成が基礎に

自己肯定感とは、子どもの成長過程において育まれるものですが、その土台となる自己信頼、他者信頼は、乳児の頃から徐々に形成されていきます。「自分は生まれてきてよかった」「自分は成長していく存在だ」「自分は価値ある人間だ」など、自分を意義あるものと捉える自己信頼と、他者に対して「この人は自分を守ってくれる」「この人と一緒にいると楽しい」「この人がいれば安心」などと感じる他者信頼は、子どもを養護し保育する大人との関わり合いから育まれます。「ありのままの自分でよい」という自尊感情は、他人と愛着関係が結ばれることで芽ばえ、やがてそれは、自己表現や共感、自我の芽ばえ、自律といった発達のプロセスを通じ、自己肯定感として大きく育まれていくのです。

〈自分自身に満足している〉



「私は、自分自身に満足していると思うか?」の問いに、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した満13~29歳の若者の合計。
(平成26年版 子ども 若者白書)より

自己肯定感を育む

人が生きるうえで必要となるコミュニケーション力。この基礎となるのが自己肯定感とされています。自己肯定感を育むことで「私は大切にされている」「私なら出来る」と自信をもって色々な事に取り組めるようになってほしいですね。

自己肯定感につながる 育ちの道すじ

乳幼児期に、子どもの気持ちに寄り添い、積極的にことばをかけて関わり合うことで、子どもの心は発達し自己肯定感も育まれます。どのように心が発達していくのか、もう一度確認しておきましょう。

安心!

0か月~

あかちゃんは、泣くことで「おなかはずいた」「おむつが濡れて気持ち悪い」といった不快さを訴えます。それに対し、大人がことばをかけて受けとめ、泣く原因を探り、不快さを取り除くことで、あかちゃんはその大人に「自分を守り、心地よくしてくれる人」と愛着を感じるようになります。こうしたことが繰り返され、他者を信頼する気持ちが芽ばえます。

他者信頼

愛着形成



自己表現



他者と関わる喜び

3か月~

首がすわると声の通りもよくなり、声を出して笑うようになります。楽しいことでたくさん笑わせてあげましょう。笑うことは自己表現。「そうなの、楽しいのね」など、それに反応する大人がいれば、人と関わる楽しさを感じるようになります。喃語が出てきたら、それにもしっかり応答を。声を出して人と関わる喜びを覚えます。

自我の芽ばえ



2歳~

自我が芽ばえると、自分の思いを主張するように。子どもがイヤイヤをしたり、泣いたりしたときは、ことばにできない気持ちをくみ取り、「まだあそびたかったんだね」などと代弁を。その大人の態度が、受け入れられているという安心感や、わかってくれたという満足感を子どもにもたらし、自分を肯定的に捉えられるようになります。

楽しい!

5か月~

何かを発見したとき、それを大人に知らせようと子どもから声をかけるようになります。子どもと大人の二項関係から、対象物が加わった三項関係が生じるのです。子どもが興味あるものをじっと見ているとき、大人も同じものと一緒に見て「わんわんを見ているのね」と、ことばを交わすと、そこに心の通い合いが生まれ、共同注視にもつながるのです。

共同注視

指さし



わかってくれる!

うれしい!

